

弥生時代後期竪穴住居の研究（８）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

2016（平成28）年度から弥生時代後期竪穴住居の研究と題して、神奈川県立埋蔵文化財センター時代の『かながわの考古学』第4・5集において「弥生時代竪穴住居の基礎的研究」として集成・分析を行って以降の、1993～2015年度に発掘調査報告書が刊行された遺跡の後期～古墳時代初頭の竪穴住居について集成を行ってきた。最終的に142遺跡・4,769軒の竪穴住居についてデータ化することができた。これまで、各年度に集成した川崎市域、横浜市域、三浦半島・湘南、県央、県西、西湘の各地域の分析を個別に行ってきたが、今回は最終的な県域全体の分析を試みる。本来は、過去の集成データとの統合作業を経て総合的な分析とすべきところではあるが、およそ30年前に行った集成は紙媒体のカード記録として神奈川県埋蔵文化財センター図書室に保管されており、今回これらのデータ化作業を実施することができなかった。このため、分析内容は今回集成分のみについての客観的事実が中心とならざるを得ず、また、軒数の多さから面積については分析を行うことを断念している。対象としなかった中期宮ノ台期以前の追加集成を含め、今後の課題として残す部分が多くある。しかしながら、過去の集成件数は後期～庄内期あわせ1,561件と少なく、今回蓄積したデータ件数は単独で分析するに遜色ないものであり、集成開始当初の目的は達せられたと判断し、本論をもってこのテーマについて一旦完了とする。

1. 帰属時期別住居軒数

帰属時期：対象とした142遺跡の竪穴住居跡は4,769軒である。これらの帰属時期は、後期：3,410軒、庄内期：575軒、帰属時期不明：784軒（中期～後期21軒、中期～古墳時代前期1軒、後期～古墳時代前期431軒、不明331軒）である。分析の対象とした竪穴住居跡は、後期および庄内期に帰属するものとした。各対象遺跡と住居軒数および地域ごとの分析は弥生時代後期竪穴住居の研究（2）～（7）（弥生時代研究プロジェクトチーム2018～2023）を参照されたい。

2. 住居形態など

平面形態：住居の平面形態について、前回の集成では、後期に入ると隅丸方形のものが約75%と統一される傾向にあり、庄内期では方形化が顕著であると報告されている。

今回の集成では、平面形態が不明なものを除いて、後期2656軒、庄内期489軒の平面形態を確認した（第1図）。後期では、隅丸（長）方形が1697軒：63.9%と全体の半数以上を占めていて、楕円形（楕円形と推定されるもの含む）の640軒：24.1%を足すと全体の88.0%である。地域別に見ても、県下全域で隅丸（長）方形と楕円形が最も多い傾向が顕著に認められ、後期では隅丸の平面形態が主体を占めていることがあらためて確認された。次いで、（長）方形が188軒：7.1%、円形が123軒：4.6%と、県内各地域において一定数が存在していて、特に円形のものは県央で30軒、県西では68軒とやや多く確認されている。

庄内期では、隅丸（長）方形が359軒で73.4%と全体の過半数を占めていて、（長）方形の77軒：15.7%を足すと全体の82.2%である。地域別に見ても、県下全域で隅丸（長）方形が最も多いことが確認され、この

時期には平面形態が方形（長方形）化していることが顕著に表れている。後期に比較すると、楕円形は43軒：8.8%と大幅に減少しているが、西湘では楕円形が10軒確認されているため、今後の資料数の増加を待つて再確認する必要がある。

方形指数：住居形態の変化について、住居の隅の部分の丸みの度合いを客観化するため、指数化を試みたものである（比田井1991）。四隅それぞれで指数を算出し、その平均をその竪穴住居の指数とする。指数0は竪穴住居の隅が円、指数100は隅が直角を示すこととなり、指数があがるにつれ方形化が進むことを示している。

前回の集成では、時期別割合について、後期では指数10～40未満が主体を占めていて、庄内期では指数20～70未満がほぼ横並びで、集中することなく幅広い分布が認められるとした。

今回の集成では、後期874軒、庄内期232軒の指数を算出した。時期別の比率（第2図）では、後期では指数20～30未満をピークとして、その前後の10～20未満と30～50未満が比較的多く、それらの合計は63.2%と半数以上を占めている。庄内期では、10～70未満の広い範囲で比較的高い傾向が認められるが、40～50未満と50～60未満がどちらも20%近い数値を示している。全体的には、後期は10～50未満が、庄内期では40～60未満を中心とする傾向になることが認められ、前回の集成に近い結果となっているが、事例の増加により地域ごとの様相に違いが見えてきている。

地域ごとに見てみると、後期の横浜地域・県央では40～70未満が多く認められ、三浦半島と湘南では10～50未満に集中する傾向がみられる。しかし県西では、0～40未満に集中する傾向がみられ、特に0～30未満が多い点は注目される。庄内期では、横浜地域では40～70未満に、県央では30～50未満に多く認められるが、その他の地域では10～70未満の間に平均的に分布する傾向があるように見える（第3・4図）。

なお、後期と庄内期のどちらにも、0～10未満の円形に近い住居が一定数存在している。

長短率：長短率は、住居の長軸の数値を短軸の数値で除し、それに100を乗じたものである。その値が大きくなれば、長軸と短軸の差が大きくなり長方形に、小さくなれば正方形に近づき、最低の値は100となる（弥生時代研究プロジェクトチーム1995）。前回の集成では、須和田期から庄内併行期までの平均値の推移を示し、宮ノ台期から新しくなるにつれ、数値が小さくなる傾向が確認された。

今回の集成では、後期は847軒を算出し、基本統計量は最大205.6（外れ値となるため図には反映していない）、最小61.1、平均113.6、中央値111.5である。庄内併行期は211件を算出し、基本統計量は最大163.8、最小75.7、平均111.4、中央値110.2である（第5図）。前回の集成では、平均値が後期で113.0、庄内併行期は110.9であり、今回の結果と大きな差は認められない。

第6図に、地域ごとの平均値を示した。湘南・三浦半島では後期の数値が低く、庄内併行期には逆に高くなる傾向が認められた。また、後期の県央・県西・西湘では、県東部の川崎市域・横浜地域・湘南・三浦半島よりも数値が高い傾向が認められる。庄内期では、件数の少ない川崎市域、西湘を除くと、110～115前後とほぼ一定した比率にあり、方形化する傾向を示すとも考えられる。なお、数値100の住居は、後期の横浜地域で8件、湘南で4件、三浦半島で1件、県央で10件、県西で7件の計30件である。庄内併行期では、川崎市域、横浜地域、県央、県西、西湘で各1件、計5件である。（穴戸）

主軸方位：主軸方位は、主として主柱穴配置および奥壁側へ偏った炉と入口施設を軸として決定されるが、報告によっては竪穴住居が完存していない場合に炉と方形基調の壁面の方向あるいは検出された柱穴等を元に行っている場合があり、若干の不確定要素が混入している。後期2127軒、庄内期411軒について集計し、第

7 図にグラフで示した。0 が真北を示し右90度が東・左90度が西となる。大部分の竪穴住居がN-40°~50°-Wを中心とした北西方向を主軸とし、入口を南東方向へ向けて構築される傾向にあることがわかる。また、真北を挟んで北東方向に主軸を持つ竪穴住居も一定程度存在しており、地域的には県央地域に多く、これらの傾向は後期・庄内期に共通している。グラフに表れにくいが入りが東西方向より北を向く竪穴住居が後期では全体の3.8%、庄内期では5.7%存在し、県央地域を中心に確認される。また、短軸方向に主軸を持つ竪穴住居は、後期で28軒（川崎市域1・三浦半島4・湘南5・県央8・西湘7・県西3）・1.3%、庄内期で15軒（横浜市域5・湘南2・県央3・西湘4・県西1）・3.6%存在する。（新開）

主柱穴：今回の集計は、前々号までに行ってきた各地域の集計表に基づいて、神奈川県内全体の集計を行った。集計の方法はこれまでに示したとおり、住居跡での主柱穴本数が確認できたものについて集計しており、完形ではない住居跡についても柱穴配置により元の柱穴数が推定可能な場合には、推定本数で集計したものである（第8図）。後期では集計総数1458軒中、主柱穴4本のものが1224軒で84%を占め、次に主柱穴数0本のものが166軒で11.4%である。庄内期では総数330軒中、主柱穴4本のものが289軒で87.6%を占め、次いで主柱穴数0本のものが25軒で7.5%である。後期も庄内期も主柱穴4本が84%以上と大多数を占め、次に多い主柱穴0本の10%程度とは大きな開きがある。後期も庄内期も、主柱穴数はこの2種類で95%以上であり、時期別には同様の傾向と言えるが、地域的には主柱穴数0本が極めて少ない県東部（川崎、横浜、三浦）と、主柱穴数0本が比較的多く25~30%程度と一定の割合を占めている県中部（県央、湘南）、10%程度でその中間的様相と言える県西部（西湘、県西）と、大きく3地域に特徴が分かれるようである。各地域の集計を参照していただきたい（弥生時代研究プロジェクトチーム2017~2023）。なお、主柱穴数が1~3本については、上屋構造と関わるので柱穴配置の有り方とともに検討が必要である。（池田）

3. 住居内施設について

炉：炉は、屋内での煮炊きや暖を取るための施設であり、柱穴と並んで竪穴住居の最も基本的な施設の一つである。住居内の中央やや奥壁寄りに設置されることが多いが、その構造にはいくつかの種類が確認されてきた。今回の集成では、以下の分類に従って種別毎の集計を行った。床面の一部を皿状に掘りくぼめただけの地山を火床とするものを「地床炉」、火床に粘土を敷いたものを「粘土板炉」、炉の火床に接して一方に細長い礫（枕石）を添えるあるいは埋め込むものを「枕石炉」、同様に棒状等の粘土塊を添えるものを「枕粘土炉」、土器片を添えるものを「土器片炉」、として集成した。

集計では、炉が複数確認された竪穴住居が一定数あるが、同一種別の炉である場合は1件とし、種別が異なる場合はそれぞれ1件とした。このためデータ件数は竪穴住居数とは一致しない。データ件数は後期1927件、庄内期329件である（第1表）。

第9図に集成された炉形態の時期別構成比を示した。前回の集成では地床炉の割合が宮ノ台期75.1%、後期84.6%、庄内期90.2%となり、宮ノ台期以降10%程度ずつ地床炉の割合が増加する傾向が明瞭に認められたが、今回の集成では地床炉が80%前後、粘土板炉が約2%、枕石炉・枕粘土炉・土器片炉といった支持物と考えられる物体を設置する炉の一群が15~18%と、後期と庄内期での顕著な構成比率の変化は認められなかった。一方、集成件数が多く、前回の集成で粘土板炉の実数が他時期に比して圧倒的に多かった後期について水系別に構成比を第10図に示した。横浜・川崎および県央の相模川周辺から西部地域は地床炉割合がほぼ80%以上となり、枕石炉を中心とした支持物を設置する炉形態が残りをおさめる傾向がほぼ共通するが、藤沢市を中心とする境川・引地川水系では、粘土板炉が26.6%と目立って多く地域的な偏在が顕著である。ま

た、三浦半島は枕石炉の比率が50.9%と非常に高い。三浦半島では各地にある風化した露頭等から土丹石と呼ばれる比較的軟質な石材が採れ、また風化し易く再利用が難しいため、こうした条件が反映している可能性がある。逆を言えば、再利用可能な石材は抜き取られ結果として地床炉として認識している可能性があり、他地域でも枕石炉の構成比率はもっと高いのかもしれない。今回の集成では、粘土板炉に枕粘土が付随している藤沢市稲荷台地遺跡群C・D地点の3・24号住居址の例や、粘土板炉に枕石が付随する海老名市本郷遺跡KA地区12号住居跡の例があり、今回は炉の種別として火床の構造の別である地床炉・粘土板炉等と枕石炉等を同列に扱ったが、区別して集成・検討することが今後の課題だろう。(新開)

入口施設：弥生時代の堅穴住居址では、堅穴部の平面形態と支柱穴（と推定されるもの）の配置、焼失事例で確認された建材の痕跡等から鑑みて、柱建ての上屋がかけられていたものと考えられている。県内の発掘調査で確認された事例のうち、その全体がうかがえる程度に遺存しているものでは、多くの場合、支柱穴の内側の一面に、先述の炉址が設けられている。この炉の反対側にあたる壁側に小穴が1基、もしくは複数基が対になる等の状態で検出されることがあり、梯子や階段等の施設を設置した痕跡と推定される。これは「堅穴住居の奥側に炉が設けられ、その反対側の壁際に入口施設が存在する」のではないかと、という推論も影響しているが、他の側の壁付近に同様の小穴が検出される事は少なく、弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居址のうち、総件数の約1割～2割程度の事例で、こうした入口施設が検出されている事も事実である。

これらの施設は主として「入口穴」、または「梯子穴」などと呼ばれており、前回の集成では中期中葉から中期後葉宮ノ台期を経て、いわゆる庄内期までの事例を確認した。またその時点での、完存もしくは全貌がわかる事例では、「時期が新しくなるにつれて入口穴の無い住居の件数が増加する」傾向を指摘しつつ、他の付帯施設に比べて「入口穴が発見されにくいこともあるだろうが、住居の壁高などと関連する可能性」についても言及している。

今回集成した事例では、後期では384軒で、庄内期では119軒で、それぞれ入口穴・梯子穴が検出されている。各時代・時期の総軒数は、完存もしくはそれに近い事例だけではないので、単純に比較対象には出来ないが、総軒数に対する入口施設検出の割合は後期で11.3%、庄内併行期で20.7%であり、むしろ時期が新しい方がその比率は上昇している（第11図）。とはいえ、こうした入口施設は他の付帯施設に対して、前出のように壁高や施設そのものの構造と小穴深度の関係の変化や、住居床面における土間・床の間の存否も影響する事が想定され、現行の検出比率は今後の調査事例の増加で再び覆りかねない可能性をはらんでいる。ここでは、今回集成した事例において、後期と庄内併行期それぞれで、県内の各地域でもその検出比率には一定の傾向が認められ、入口施設の構造には小規模な地域性が存在する可能性があるという事と、県域全体の事例としては、時代・時期の変遷に伴い住居堅穴部や上屋部分の構造・規模が変化していく中で、入口施設そのものの住居における位置づけも変化した可能性がある、という事を指摘するに留めたい。(渡辺)

貯蔵穴：今回の集計では、全体で750軒の堅穴住居で貯蔵穴が確認されている。後期では615軒で貯蔵穴が確認され、そのうち38軒で複数の貯蔵穴が確認されている。複数の貯蔵穴が確認されている住居には、貯蔵穴が2基のものが30軒、3基のものが7軒、4基のものが1軒あるが、複数基ある貯蔵穴に新旧が確認されているものもあるので、住居建て替えを含めた貯蔵穴作り替えによる結果、複数基が検出されている場合があり、必ずしも複数基同時存在を示すものではない。庄内期では135軒で貯蔵穴が確認され、そのうち6軒で複数の貯蔵穴が確認されている。その内訳は貯蔵穴2基が確認されているものが5軒、3基のものが1軒である。貯蔵穴を有する住居の数は、後期から庄内期へ大きく減少し、貯蔵穴の保有率は後期の75%から庄内

期には57%へ減少する（第12図）。なお貯蔵穴を持たない住居は、後期が203軒、庄内期が100軒である。「貯蔵穴無し」の判断は、堅穴住居全体の約80%が残存している住居を対象として、貯蔵穴が確認されなければ「無し」と判断して集計した。住居の一部が調査されているだけでは、貯蔵穴無しの判断は出来ない（「有り」は可能）ため、暫定的に今回の分析にあたっての貯蔵穴が無い住居の判断基準とした。「貯蔵穴有り」については、残存度に関わらず「有り」として集計している。前回の分析（弥生時代研究プロジェクトチーム1995）において、貯蔵穴を持つ住居の割合は、中期後半宮ノ台期以降、時期が新しくなるにつれて減少する傾向が指摘されているが、今回も同様の傾向を見てとることが出来る。

続いて、堅穴住居の貯蔵穴には、その周囲に周堤などの区画施設が付随して検出されることがあるが、後期では貯蔵穴がある住居615軒のうち130軒で周堤を有する貯蔵穴が確認され、1軒で周溝を有する貯蔵穴が確認されている（三浦半島の横須賀市船久保遺跡Y2号住居跡）。分析の上では周溝を有する貯蔵穴は、周堤を有する貯蔵穴に含めて取り扱った。庄内期では、貯蔵穴がある住居135軒のうち、40軒で周堤を有する貯蔵穴が確認されている。貯蔵穴を持つ住居は後期から庄内期にかけて減少するが、周堤を有する貯蔵穴の割合は、全体としては後期よりも庄内期に若干増加している（第13図）。また後期と庄内期を通して横浜市区と三浦半島に、周堤を有する貯蔵穴の割合が比較的高いことが認められる。但し、分析資料数の地域的な偏りが著しいことにも留意すべきであろう。全体的に、貯蔵穴を持つ住居の検出数は全容が把握できる状態の住居数が多い地域に偏っていることが窺われ、住居の発掘調査軒数とは必ずしも比例していない。発掘調査された住居数が多くても重複が著しい遺跡では、分析母数として有効な残存度の住居数が限られることがあるため、分析母数が極めて少ない場合、「比率」に影響している可能性がある。現状では、貯蔵穴の周堤の有無については全体的傾向を指摘するに留め、地域別傾向を判断するためには、もう少し資料数が充実したうえで検討する必要があると思われる。（池田）

周溝：周溝について全周・部分・無しの3種類に分類し、流域ごとの後期と庄内期を比較した（第14図）。なお、報告書から周溝の有無が読み取れない住居については今回の分析から除外した。

地域ごとによって傾向は異なる。多摩川流域では、庄内期になると周溝を持つ住居の割合は減る。鶴見川流域、大岡川・帷子川流域、相模川流域では後期と庄内期の割合に差はほとんどない。三浦半島では周溝をもつ住居の割合はほとんど変化しないが全周に周溝のある住居の割合が若干高くなる。柏尾川流域では、後期では周溝をもたない住居が多かったのに対し、庄内期には部分的な周溝をもつ住居の割合が高くなっている。境川では、周溝をもつ住居の割合が庄内期になると高くなる。金目川では、周溝をもつ住居ともたない住居の比率に変化は見られないが、周溝が全周なのか、部分的なものなのかの比率が後期と庄内期で逆転する。酒匂川流域は周溝をもつ住居の割合が後期と庄内期を通じて低く、庄内期には全周の周溝をもつ住居は無くなる。

以上のように、地域ごとにまとめてみたが全地域を通した傾向というのではない。流域によって異なった変化をしている。庄内期は今回の分析の対象となる住居数が少ないため、傾向を語るに不十分なサンプル数かもしれない。今後の調査数の増加に期待したい。（吉田）

4. 更新・廃絶などについて

拡張：住居の重複とは、主柱穴や炉が重複するものや、周溝や周壁の一部または全周が増築されるなどの痕跡が認められるものを指す（弥生時代研究プロジェクトチーム1995）。前回の集成では、須和田式から庄内期の完形住居における拡張の有無を示し、時期が下るに従い、その割合が減少する傾向を確認した。

県内の完形住居における拡張の有無を時期的に見たのが第12図である。各時期における拡張の確認できた住居の割合を見ると後期は12.1%、庄内期11.3%と後期が若干優位である。前回の集成では後期は7.4%、庄内期で3.2%のため、資料の増加に伴い、住居の拡張事例が増えた結果だと考えられる。

第16図は水系ごとに示した住居の拡張の割合である。鶴見川水系・境川水系・三浦半島では後期に比べ、庄内期に拡張する割合が大きくなるが、他の地域では拡張がなくなるないしは、減少傾向になる。住居の拡張は複数行う事例も見られ、後期は鶴見川水系で2例、庄内期は鶴見川水系で3例認められた。(齊藤)

焼失住居：今回集計した神奈川県内における弥生時代後期の竪穴住居総軒数に対する焼失住居の割合は3410軒中210軒(6.2%)である。地域別にみると横浜・川崎市域で637軒中48軒(7.5%)、三浦半島で401軒中20軒(5.0%)、湘南で311軒中46軒(14.8%)、県央で779軒中45軒(5.8%)、西湘で1165軒中4軒(0.3%)、県西で117軒中47軒(40.2%)となる。焼失住居の割合が最も高いのは県西で、次いで湘南、横浜・川崎市域となる。西湘では竪穴住居軒数が1165軒と地域別では最も多いが、焼失住居軒数は非常に少なく、竪穴住居総軒数と焼失住居軒数との間に比例関係はないようである。

次に今回集計した神奈川県内における庄内期の竪穴住居総軒数に対する焼失住居の割合は575軒中67軒(11.7%)である。地域別にみると横浜・川崎市域で146軒中25軒(17.1%)、三浦半島で35軒中5軒(14.3%)、湘南で60軒中9軒(15.0%)、県央で126軒中14軒(11.1%)、西湘で160軒中2軒(1.3%)、県西で48軒中12軒(25.0%)となる。焼失住居の割合が最も高いのは後期と同様に県西で、次いで横浜・川崎市域、湘南となる。西湘では後期の傾向と同様に最も割合が低くなっている。県西では後期と比較して焼失住居の割合は減少するものの、地域別では最も焼失住居が存在する割合が高い。また、庄内期は県内全体で焼失住居の割合が増加傾向となる(第17図)。

前回の集成では後期および庄内期における竪穴住居総件数に対する焼失住居の割合はほぼ同じ傾向であったが、今回の分析では後期と比較して庄内期に焼失住居の割合が県内全体で増加する傾向となった。

今回の集計作業を通じて得られた神奈川県内における時代別、地域別の傾向や動向の要因については、より詳細に焼失住居そのものの分析・検討を行う必要があり今回は言及しえないが、定量的な集計作業を通じて傾向や動向を把握することで、検討すべき課題と探るべき要因をある程度抽出できることが示せたのではないだろうか。(戸羽)

5. まとめ

財団が発足して間もなく県内の弥生時代の竪穴住居を集成してから30年が経過した。この間の調査事例の増加は著しいものがあり、再度の集成の必要性が以前より指摘されていた。なかでも、後期以降の竪穴住居の調査事例の増加は目を見張るものがあり、今回、1993年度以降に発掘調査報告書が刊行された遺跡の弥生時代後期～庄内期の竪穴住居の集成を行った。各項目についての分析は、記載のとおりであるため、最後に全体的なまとめを記すこととしたい。

住居の平面形態については、報告書に記載された形状と方形指数からのアプローチを行なった。「隅丸方形」と「楕円形」の識別などは報告者の主観が入るため、このような集成時の課題として指摘されるところであるが、これを補うものとして方形指数の計測を行っている。

中期後葉の宮ノ台期の竪穴住居平面形態は、非常に均質で安定した平面形と指摘されることも多く(大島・渡辺2000)、なかでも神奈川県は埼玉県や千葉県と比較して円形傾向が強い(飯塚2003)。前回の集成でも宮ノ台期の方形指数は22.1と最も低い値となっており、後期以降徐々に方形化が進むことが示されている。今

回も後期に比べ庄内期に一層方形化が進む傾向が認められた。方形化する理由としては、上屋構造の変化及び効率的に床面積を増加させる目的などと関連づけて言及されることが多い。近畿地方や東海地方、また中部高地などでも後期に円形から方形へと変化することが指摘されており（埋蔵文化財研究会2009他）、後期・庄内期の時間幅のなかのどの段階で方形化が進むのか、他地域との詳細な併行関係も解明していくことで、方形化の理由がより解明されると思われる。

地域ごとでは、前回は三浦では他と比較すると指数の上昇がみられないという指摘があったが、今回は横浜市域などで指数が高く、県西部は低くなる傾向が指摘された。現状ではこれ以上踏み込んだ分析は困難であるが、横浜市域を中心に分布する朝光寺原式土器分布圏の堅穴住居の方形基調が強いことなどとの関係性が想定され、今後、堅穴住居出土土器の様相を踏まえての検討が必要と考える。

長短率については、前回同様、宮ノ台期から新しくなるにつれ、数値が小さくなる、すなわち正方形化する傾向が確認された。

また、今回新たに主軸方位について分析を行ったが、後期から庄内期を通じて大部分が北西方向を主軸とし、入り口を南東方向に向けるという興味深い結果を示すことができた。神奈川県内の調査では経験的に主軸は南北を向き、南側に出入口がつくられるという印象があるが、想像以上に規格化されているといえる。

また、短軸方向に主軸を持つ堅穴住居は、東海地方からの外来系の要素という指摘があるが（西相模考古学研究会2002）、数は多くはないが、地域的な偏りなく確認された。

主柱穴は8割以上が4本柱と圧倒的に多く、1割前後の主柱穴0本が続く結果となった。前段階の中期後葉段階で、既に東日本に特徴的である「主柱配列有軸対称構造」（都出1985）は成立しているが、後期以降もその主柱配置原理は継続しているといえよう。そのようななか、主柱をもたない堅穴住居が1割前後を占める点には注意を向けたい。4本柱の堅穴住居との違いは、近年県央部などを中心に低地に占地する集落の調査事例が増加したことを反映した立地の違いによるものなのか、あるいは、4本柱と主柱穴がないものの堅穴住居の機能的な側面の違いなのか、今後検討していく必要性を感じる。

住居内施設のうち炉について概観する。県内の弥生時代を通じて最も普遍的にみられるのは地床炉である。そのため、この地床炉に石や粘土、土器片等が付属するものを中心に分析を行った。三浦で枕石炉の比率が高くなるが、項目ごとの分析で述べたように、選択される地元の石材が軟質かつ風化しやすいため再利用が困難で、残置された結果比率が高く出ている可能性がある。一方、地元の石材として凝灰岩等の石材が採用されることが多いと想定される県西部では、再利用のため抜き取られた結果、地床炉の比率が高くなっている可能性もある。抜き取り痕などに注意を払った調査を行う必要性を感じる。

また、前回藤沢市や伊勢原市など相模湾沿岸に多く見られることが指摘された粘土板炉であるが、今回も藤沢市を中心とする境川・引地川水系で遍在が顕著であることが指摘された。「火皿」「火皿炉」などとも称される粘土板炉は、東海地方からの影響が想定されている（仲野1980・合田2006）。弥生時代後期初頭に遺跡数が激減した神奈川県に、東海地方の複数の土器型式分布圏を故地とする集団が「貫入的」に流入してくるものと無関係ではなく、遺構から広域の地域間交流をみるのが可能な例といえるだろう。

入口施設については、前回の集成時に比べ検出されない事例が後期・庄内期ともに比率が高くなる一方、時期が下るにつれ入口施設のない事例が有意に増加するという傾向はみられなかった。

前回、時期が下るにつれ減少するといわれた貯蔵穴は、今回も同様の結果となった。しかし、先述したように分析資料数の地域的な遍在があり、現状の数値でそのまま水系ごとの傾向を論じることには慎重である

べきといえる。このことは周溝についても同様で、前回同様に時期が下るにつれ周溝がないものが増加するという傾向となったが、水系ごとの傾向は今後の資料の増加によっては変化する可能性もある。むしろ、中期～庄内期までに周溝をもつ事例が減じていくことから、竪穴住居の上屋構造や竪穴の掘り込みの深さなども絡めての検討が重要と考える。

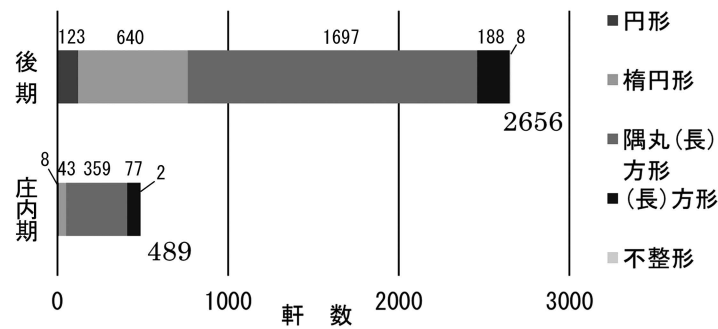
拡張については、前回の集成時には中期後葉宮ノ台期の割合が高く、時期が下るにつれ減少していくことが指摘された。今回の集成では、宮ノ台期よりは拡張の割合は低いものの、後期と庄内期で明確な差は認められなかった。住居の拡張については、集落（住居）の存続期間等に絡めての検討などがなされてきたが、近年では拡張方法が部分的か全方位型かに分けての考察、さらにそこから伐採具や竪穴住居の空間利用についての検討などもなされるようになっており（佐藤2022）、発展的な検討が期待される。

焼失住居については、前回宮ノ台期の比率の多さに注目が集まった。後期以降は全体の1割程度であり、今回の集成でも全体の1割前後と同様な結果となった。地域ごとの偏差も浮かび上がっているが、根本的な問題・課題として「焼失」理由が1つではない点があげられる。炭化物や炭化材、焼土などの情報から「焼失住居」としたものの、失火によるものなのか、争いなど集団間の緊張関係によるものなのか、あるいは竪穴住居の廃絶儀礼的な火入れなのかなど、理由は様々であることが想定される。報告書の記述からはこれらの原因を特定することは困難な場合が多いが、より踏み込んだ検討をする段階に来ている印象をもった。

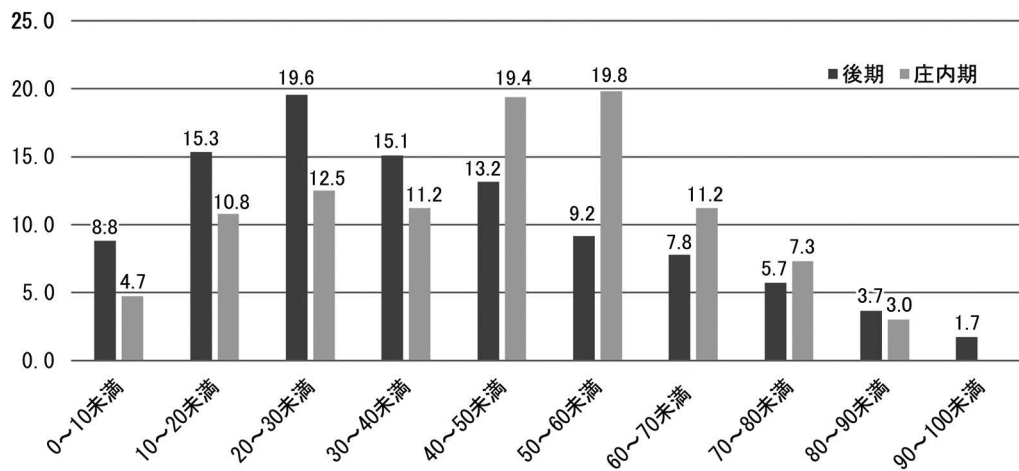
以上、いくつかの側面から集成データの分析を試みた。中期後葉から後期初頭にかけて、極端な遺跡数の減少とともに土器などの連続性が問題とされて久しいが、宮ノ台期から後期にかけての竪穴住居の系譜上のつながりについても今後の検討課題と考える。また、後期・庄内期の周辺地域との方形化に至るまでの細分時期の比較、古墳時代にかけての画期など、いくつかの課題を挙げてまとめとしたい。（飯塚）

【参考文献】

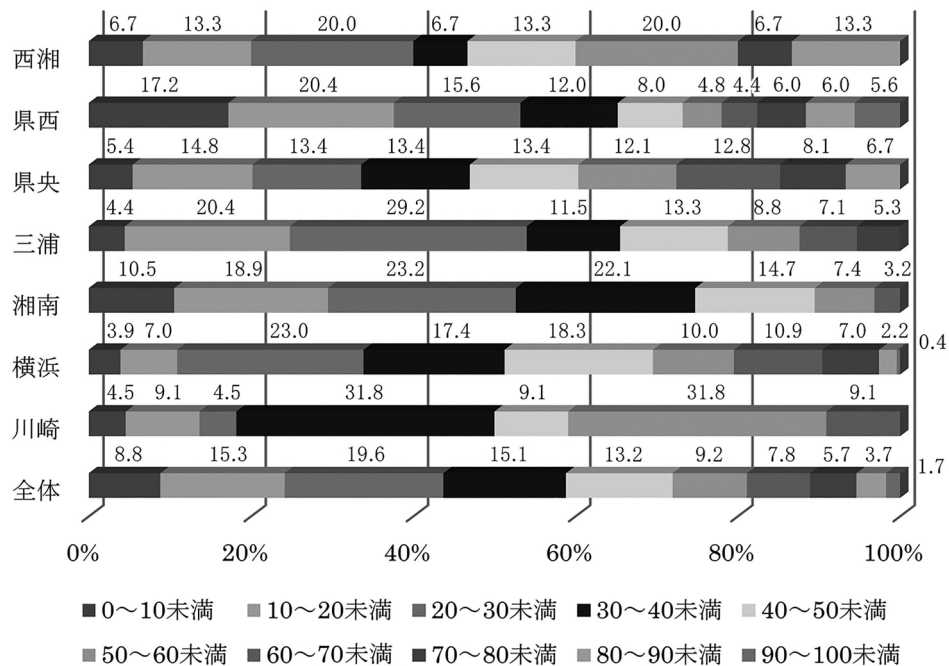
- 飯塚美保2003「宮ノ台期竪穴住居にみられる地域性」『西相模考古』第12号西相模考古学研究会
- 大島慎一・渡辺 外2000「第2部遺構の分析」『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』東海大学
- 合田芳正2006『御殿前遺跡－西ヶ原二丁目45番10号地点－』共和開発株式会社
- 佐藤兼理2021「拡張住居からみる弥生時代の人の移動－南関東弥生中期～後期集落遺跡を中心に－」『考古学集刊』第17号
- 都出比呂志1985「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部（都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』に再録）
- 仲野紀巳子1980「弥生時代の遺構と遺物について」『中里前原遺跡－第一次発掘調査報告書－』埼玉県与野市 中里前原遺跡調査団
- 西相模考古学研究会2002『弥生時代のヒトの移動 相模湾から考える』六一書房
- 比田井克仁1991「住居形態の変遷と画期」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部
- 埋蔵文化財研究会2009『第58回埋蔵文化財研究集会 弥生時代後期の社会変化』発表要旨・資料集
- 弥生時代研究プロジェクトチーム1994・1995「弥生時代竪穴住居の基礎的研究（1）・（2）」『神奈川の考古学の諸問題』かながわの考古学第4・5集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 弥生時代研究プロジェクトチーム2018～2023「弥生時代後期竪穴住居の研究（2）～（7）」『研究紀要 かながわの考古学』23～28 公益財団法人かながわ考古学財団
- 和島誠一・田中義昭1966「住居と集落」『日本の考古学 Ⅲ 弥生時代』河出書房新社



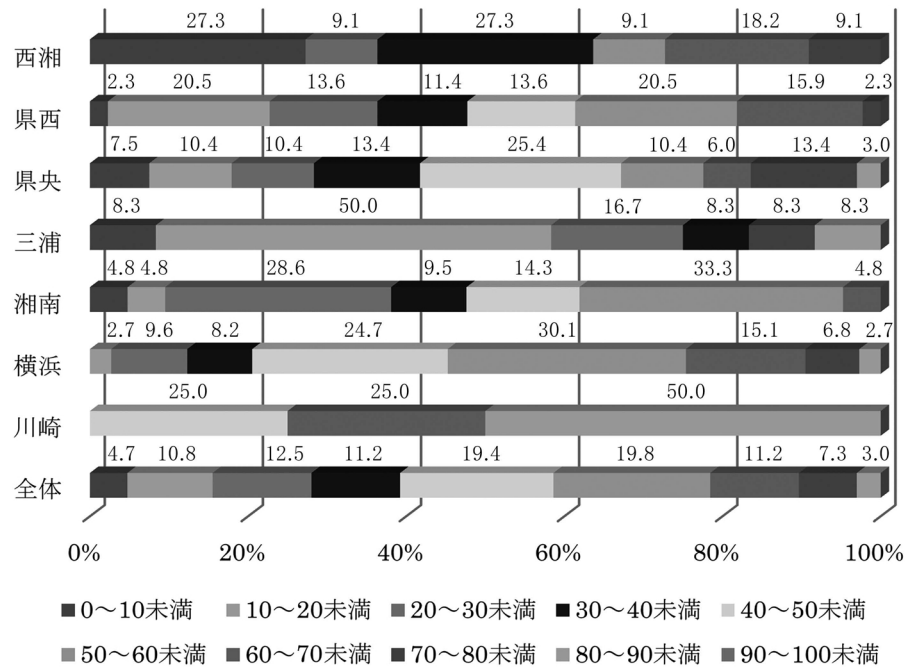
第1図 竪穴住居平面形態の時期別集計



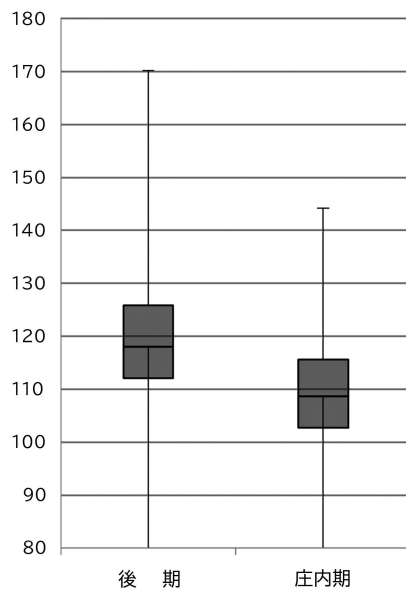
第2図 方形指数の時期別比率



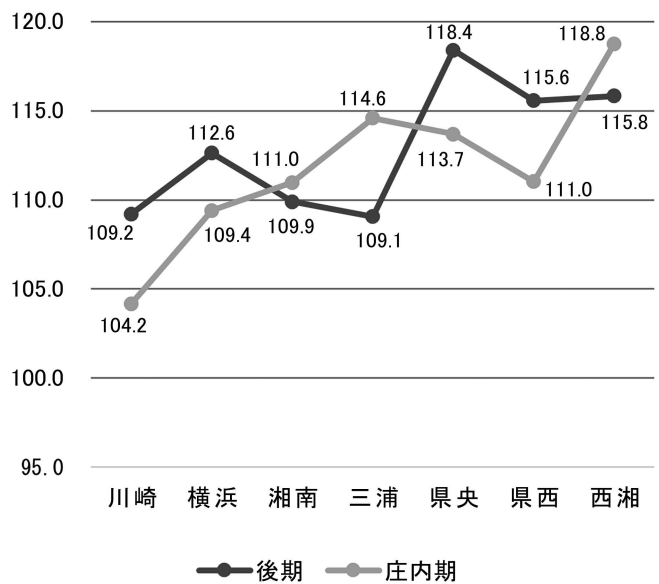
第3図 方形指数の地域別比率（後期）



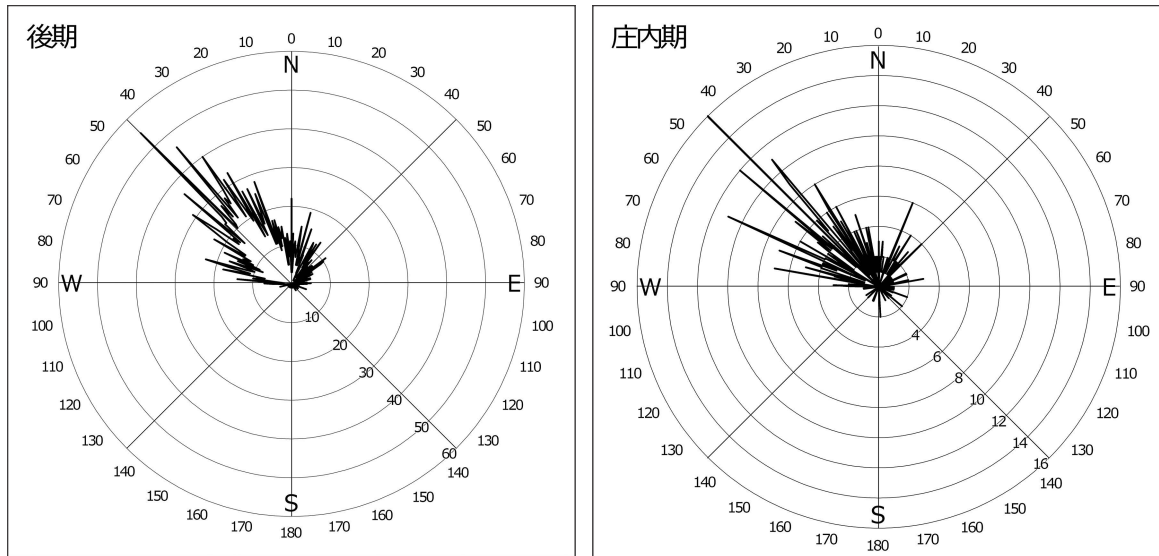
第4図 方形指数の地域別比率（庄内期）



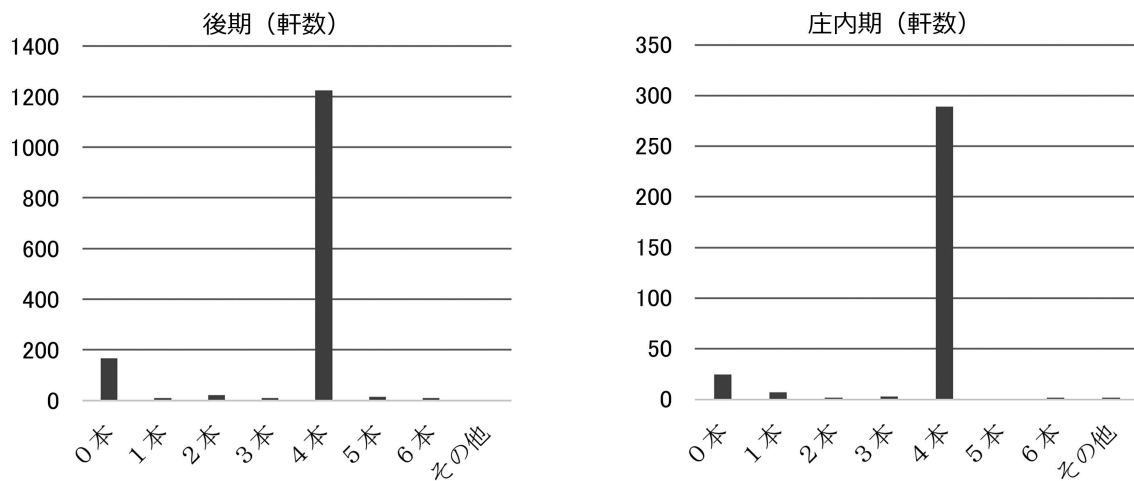
第5図 時期別全体の長短率



第6図 地域ごとの長短率（平均値）



第7図 主軸方位の分布（軒数）



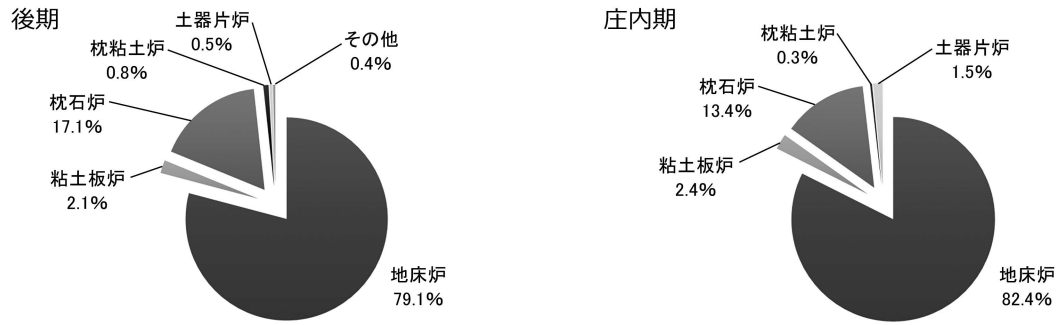
後期	主柱穴数	0本	1本	2本	3本	4本	5本	6本	その他	合計
	軒数	166	11	22	9	1224	15	10	1	1458
	割合 (%)	11.4	0.8	1.5	0.6	84.0	1.0	0.7	0.1	100.0

庄内期	主柱穴数	0本	1本	2本	3本	4本	5本	6本	その他	合計
	軒数	25	7	2	3	289	0	2	2	330
	割合 (%)	7.6	2.1	0.6	0.9	87.6	0.0	0.6	0.6	100.0

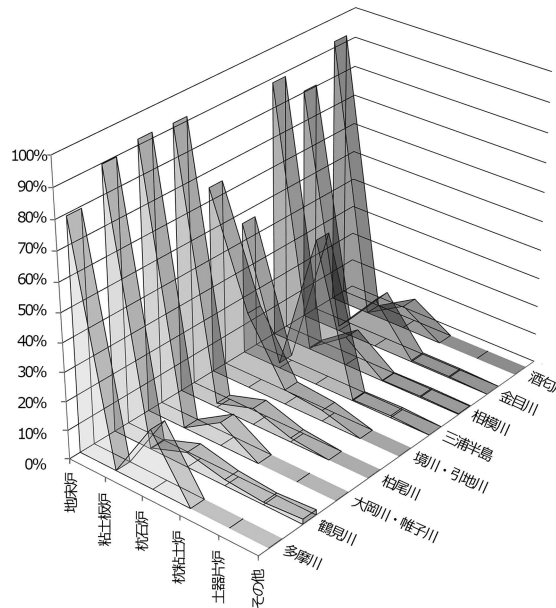
第8図 主柱穴本数

第1表 炉の形態別集計結果

炉種別	多摩川		鶴見川		大岡川・帷子川		柏尾川		境川・引地川		三浦半島		相模川		金目川		酒匂川		件数計	
	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期
地床炉	23	5	296	63	34	11	64	3	51	42	129	11	377	35	504	79	46	22	1524	271
粘土板炉	0	0	1	0	0	0	1	1	21	4	5	2	2	1	10	0	0	0	40	8
枕石炉	6	0	17	2	3	0	4	0	4	11	142	13	43	4	107	13	4	1	330	44
枕粘土炉	0	0	7	0	0	0	1	0	3	0	1	0	1	1	3	0	0	0	16	1
土器片炉	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3	2	0	2	1	3	1	0	0	10	5
その他	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7	0
水系別件数	29	5	330	65	37	11	70	4	79	60	279	26	426	42	627	93	50	23	1927	329



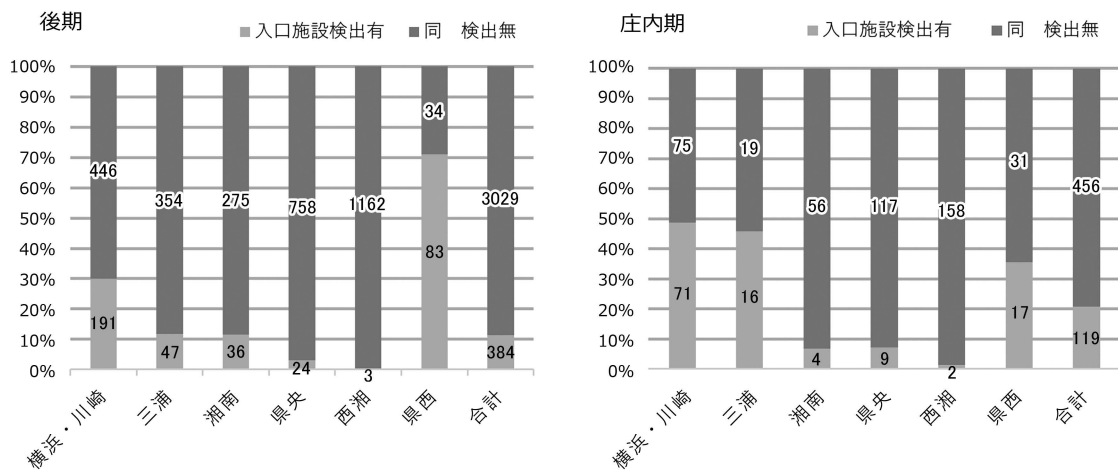
第9図 炉形態の時期別構成比率



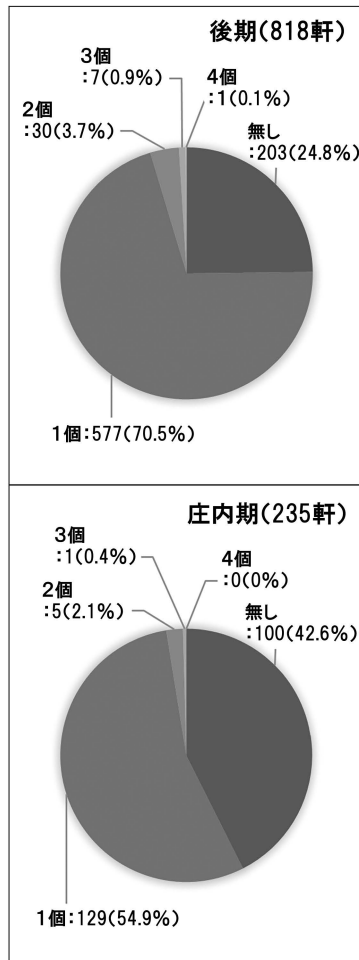
水系	地床炉	粘土板炉	枕石炉	枕粘土炉	土器片炉	その他
多摩川	79.3	0	20.7	0	0	0
鶴見川	89.7	0.3	5.2	2.1	0.9	1.8
大岡川・帷子川	91.9	0	8.1	0	0	0
柏尾川	91.4	1.4	5.7	1.4	0	0
境川・引地川	64.6	26.6	5.1	3.8	0	0
三浦半島	46.2	1.8	50.9	0.4	0.7	0
相模川	88.5	0.5	10.1	0.2	0.5	0.2
金目川	80.4	1.6	17.1	0.5	0.5	0
酒匂川	92.0	0	8.0	0	0	0

(%)

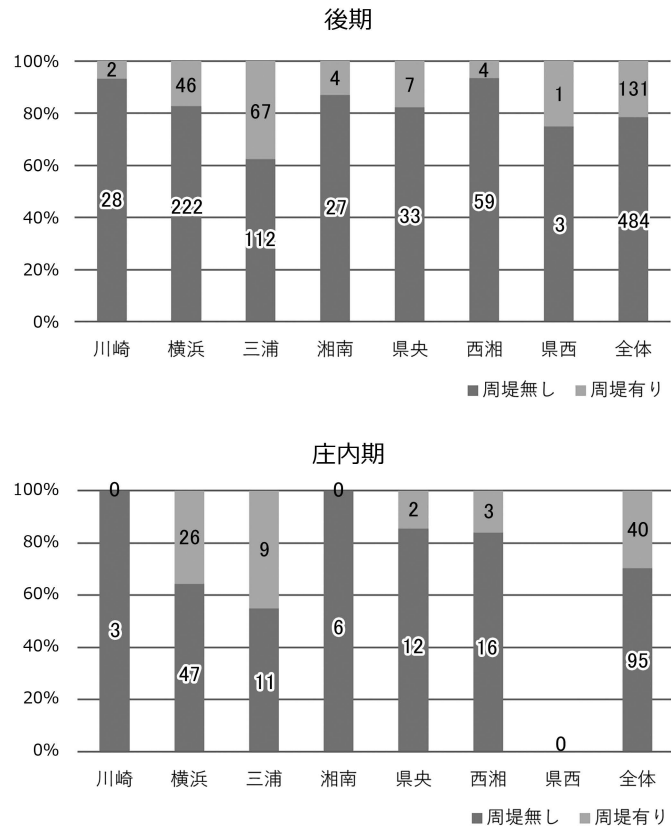
第10図 後期炉形態の水系別構成比率



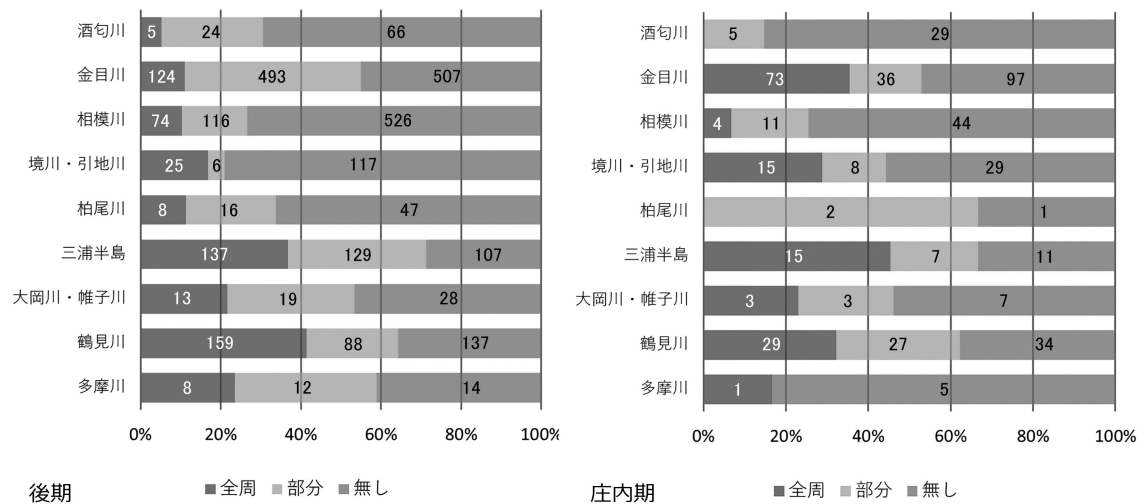
第11図 竪穴住居総軒数に対する入口施設検出の割合



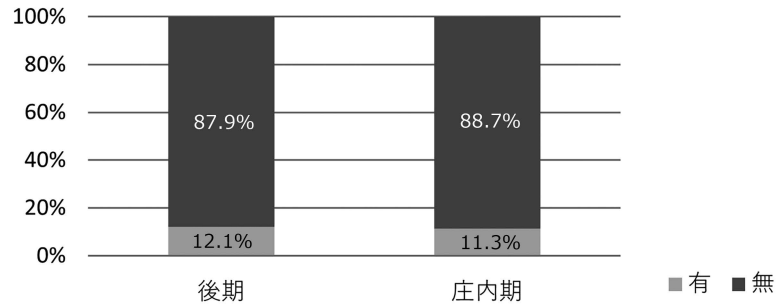
第12図 貯蔵穴の有無



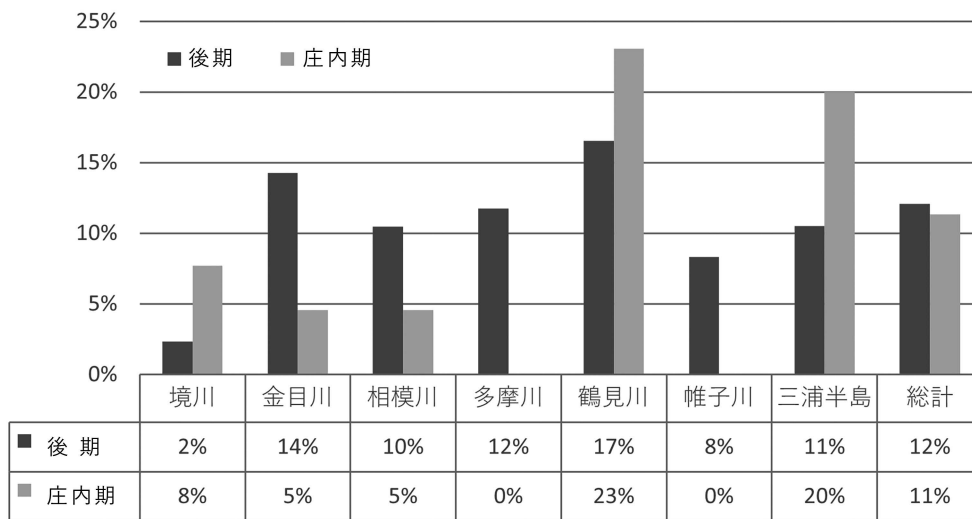
第13図 周堤を有する貯蔵穴の割合



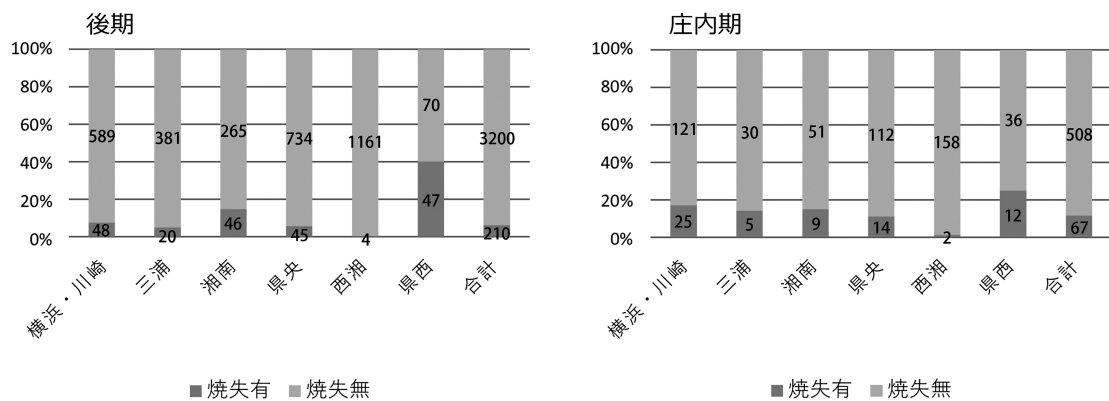
第14図 時期別水系別の周溝有無



第15図 時期別拡張の有無（完存のみ）



第16図 水系別完存住居中の拡張割合



第17図 時期別竪穴住居総軒数に対する焼失住居の割合